ラブカクテルス　その８９

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その８９

【Ｎコード】

Ｎ４８５１Ｆ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は捨てられないカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前は墓穴でございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺はゴミの収集業をしている。
まぁ、平たく言えば運転手だが、普通の運転手とは訳が違う。
強いて言えば不法投棄請負人と言ったところだが、実はこれと言って正式名称はない。
まあまあ金にはなるのだが、あまりワリに合う仕事とは言えない。
何しろきたないし、汚れるし、臭いし、危険とくればそれなりに貰わないとである。
少し前まではもっと儲かる仕事だって闇の世界じゃ登り景気だったが、今じゃ車と度胸さえあれば誰でもできるなんて、バカどもがあちこちで始めたもんだから、それはもう価格競争なんて話になって、頭のいいやつが仕切り出したかと思うと仲介業なんかまで出る始末。
なんだかんだやられて、それでもいい加減な組合じみたものがその内できて、やっとこの業界の単価が少し落ち着いたのだが、それで

満足かと言われれば首を横に振りたいが、堅苦しい中でちまちま仕事するのとどっちがマシかというと、やはりこっちがやめられない。そんなうまい仕組みの中で俺達はイイように使われて踊らされているのである。
いつかは俺もと思うのだが、頭がそこまで回ればきっとこんなことを今やってはいないのだろう。
まぁいい。
とりあえずさっさと仕事を終わらせよう。

俺らが請負うゴミのその大半は燃えない一般ゴミ。
資源リサイクルのできる物や燃えるゴミは一般のゴミ屋が持っていく。
しかし近年できた新法のおかげで、そのどちらにも属さないゴミは埋め立てる場所がなくなったために有料引き取りとなり、決まった曜日に回収するなんてできなくなった今の仕組みは、直接ゴミ処理施設に各家庭が持っていき、しかも1グラム当たりの引き取り値が、だいたいレストランで食事ができるくらいの額で、それが施行された時には市民は猛反対をした。
しかしその結果、市民の代表団が結成され、その後の展開で市から見せつけられた現実が、その先がないゴミの埋め立て地と悪臭、そして環境破壊。
この市側が市民の話し合いに対して、燃えないゴミへの新法の目的はこの市内からできるだけ早く燃えないゴミとなる元をなくす、又は持ち込ませない事に危機感を持って意識してほしいからだと訴え、市民代表はうなずかざるを得なくなるくらいの状況を思い知らされた。という訳だった。
しかしそれを全て完璧にしようというのはやはり、今までの便利で楽だった生活習慣がなかなかそうさせてくれない。
という訳で俺達の出番。

俺は依頼主の駐車場に着き、玄関のベルを鳴らした。
すると中年の女性が袋に詰めたブツを俺に渡してきたので、俺はおもむろに持っていた携帯式計りにそれを吊して片手を出した。
市に捨てる三分の二の値段を俺は素早く受け取る。
それを車の荷台に投げ入れると、まるで何もなかったかの様に俺は車を次の客先に走らせる。
そんな調子で十件も回ればいよいよステバに向かうのだが。
そのステバがクセ者、いやクセ場所なのだった。

ここまでの仕事は確かにそれほど危険ではない。
まぁ、ごくまれに待ち伏せに合う事が噂にあるが、俺はまだ実際に見た事がないし、仲間内でもそれはホラだなんて事になりつつある。
そんなこんなで、危ない橋はここからなのだった。

夜更けを待って俺は仕事の仕上げである投棄に移った。
俺の車は町はずれの道を土埃を立てて猛スピードで進む。
向かう先は、そう、隣町だった。
そもそも環境破壊だの、燃えないゴミの処理場所に行き詰まり、ゴミの改革をしだしたのは、そうこの隣町なのだった。
そしてこちらの町はそれに影響を受けて今回のゴミに対する新法を掲げた訳で、そんなはらいせにこっちの悪い連中が出し難くなったゴミを隣町に置き去り、つまりは不法投棄した事でこの商売は始まったのだった。
そのはらいせをした悪連中は、一度した事に懲りることなく、何度かそれを重ねることである意外な事に気付いた。
それが不法投棄したゴミが次に来たときにはきちんとなくなっていることだった。
それをいいことに不法投棄は面白いように行われ、そして商売へと繋がっていった。
しかし、隣町もただそれを黙っているわけではなく、仕事仲間や同

業の者の何人かは、やはり現行犯で捕えられ、決してその者達はこちらの町には戻ってくることはなく、行方を探すにも情報は何もなかった。
ある噂では処刑されたとかされてないとか。
しかし隣町のゴミに対する処罰は例を見ない程厳しく、その仕打ちは冷酷だとは風の噂では聞いている。
だからこの商売は危険を覚悟する必要があり、その辺を上手くできる人間じゃないと勤まらない。
そう、ズル賢く素早い俺のような人間でないと。

俺は夜空の星さえ何も照らしやしない真っ暗な闇の中を車のライトを消して口笛を吹きながら車を跳ばし、ようやくいつもの穴場に辿り着いた。
一歩間違えれば足を捕られて二度と上がって来れない底無し沼の畔。
ここが俺にとっての不法投棄の穴場なのだった。
周りは見渡しがいいから、誰かがこの辺で見張りをしていたら、その気配が直ぐに感じ取れるし、頭の冴えてる俺は暗闇スコープを付けているせいで、怪しい様子はお見通し。
しかも唯一隠れて待ち伏せできそうな沼は底無しときている。
ここまで来る道のりも、街灯一つない中を暗闇スコープだけで進んできたから、もし他にこの辺を走る車などがあればそのライトを見つけることでこちらはそれらに気付き易い。
それに加えて逃げる時も相手がこちらを見つけるまでに時間が稼げる。
しかしそんなこと依然に、こんな気味の悪い場所に誰もがこの時間帯、わざわざ足を運ぶなんてまずない筈だ。
俺の読みはいつも正しく、いつも冴えている。
この日以外は。
そう、とうとう来てしまったこの日以外は。

奴ら、つまりは隣町の対不法投棄巡視団はさすがに度重なるこの穴場に呆れて予想外の待ち伏せをしていた。
俺は車を底無し沼の手前でいつも通りにUターンして、ワガモノ顔で積み荷をワサワサと投げ捨ててそれらが終わったところで手をパンパンと叩いて払い、再び車に乗り込もうとした。
しかしその瞬間それを合図にしていたかの如く、俺にの周りは全身を黒に被った、銃を武装した物々しい連中に囲まれたのだった。
俺は反射的に手を挙げて、言われるままに車にその両手をつき、股を大きく開いた。
連中は銃をカチャカチャと鳴らしながら、俺の体に武器がないか身体検査を慎重にしながら、他の奴は無線で何やら連絡を取り合っている。
万事休すか。
しかし奴らはどこから現れたのだろうか？
こんな状況でそんなことを考えているなんて自分でも変だと思いながらも俺は周りをキョロキョロ見回すと、その気になる答えを連中の一人がニコニコしながら、そんな俺の様子に気付き、その訳を知りたいかとイタズラ好きなワルガキみたいな顔でわざわざ説明してきた。
その話しによると、なんと連中ときたら底無し沼を、水面から腰の辺りまでの深さになるように埋め立てて、そこに特殊スーツとエアマスクに、暗闇スコープゴーグルまで付けて隠れていたそうだ。
それに加え、奴が言うにはその埋め立てた物は、この辺に不法投棄されていたゴミを使ったんだと、笑って答えた。
俺は驚くよりも呆れた。
よくもそこまでして、不法投棄を取り締まる気になるなと。
しかし自分が置いて行ったゴミ達がわざわざ自分をハメる道具にされていたなんて、これも一応リサイクルなのだろうかと、そんなことを考えて俺がクスクス笑っていると、さっきの特殊部隊の隊員のヤツは、何がおかしいのかと、面白くない顔で俺を見ていた。

その後俺は隣町に引立てられて、町内裁判に掛けられた。
そして課せられた罰は、、、

俺は何人かの先に捕まって罪人となった同業の連中と一緒に、町外れにある物々しい施設へと護送された。
そしてそこの施設で囚人服を着せられると、俺達は各自スコップを持たされて地下に向かう大きなトンネルへと進まされた。
そう。俺に課せられた刑罰は強制労働。
そしてその内容とは皮肉にも、集めてきた不法投棄ゴミを埋めるための穴堀。
しかもその堀られた横穴の上とはなんと、俺達が暮らしていた町が。
墓穴を掘るとはこのことだ。
俺は複雑な気分でスコップを地面に突き刺したのだった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4851f/

ラブカクテルス　その８９

2010年12月17日14時35分発行